“くじらと移民と美人のまち”和歌山県太地町訪問記～

吉津直樹*

＜はじめに＞

本稿は2011（平成23）年10月26日～28日に行った実地調査の報告である。この簡単な報告はすでに「下関市立大学資料室だより」vol.1に「クジラとまちづくり～和歌山県太地町～」として掲載されているが、そこでは紙数の関係から詳しい報告ができなかったので、本稿はこのたび加筆したものである。潮岬、那智の滝、那智勝浦には大学院時代、すなわち41年前に行ったことがあるが、太地には寄っていない。その当時は太地がくじらの町とは知らなかったのである。

これまで長門市青海島通の鯨資料館や平戸市生月の博物館で鯨資料の展示を見たことがあるが、かねがね現在も捕鯨を行っている「捕鯨のメッカ」太地に一度は行ってみたいと思っていた。下関も鯨とかかわりが深いが、太地は古式捕鯨発祥の地で現在も20代から80代までの23人の漁師が所属する「いさな組合」の漁師たちによって、奈良時代から続く追い込み網漁での捕鯨が行われており、まさに鯨にこだわってまちづくりを行っている町である。また近年、反捕鯨団体「シー・シェパード」が太地の捕鯨の妨害をしていることが新聞やテレビで報道されているとこともあってより関心が高まっていた。

＜太地町の概要＞

現地に行く前に改めて太地町の概要を調べて驚いた。太地は潮岬のすぐ近く（20数キロ北東）でありこれまで漠然とずいぶん南にあるというイメージを持っていたが、意外にも福岡市とほぼ同緯度なのである。また那智勝浦町に取り囲まれた面積5.96㎢、人口3,251人（2010年国勢調査）の極めて面積が小さく、人口も少ない町であることにも驚いた。地図をみて一見して取り囲む那智勝浦町（183.45㎢、17,082人、2010年国勢調査）と合併せずに独立独歩でいこうとしていることがわかる。太地は1889（明治22）年に太地村と森浦村が合併して太地村となって以来、後に町制は敷いたが122年間も行政域を変えていないのである。

＜国民宿舎「白鯨」とクジラ料理＞

鯨とまちづくりを調べるのが目的であったことからまず鯨料理を食べないわけにはいかない。同町で本格的に鯨料理をだしているのは国民宿舎「白鯨」（町経営）であったことからそこに２日間泊まることにした。受付で「夜の食事は何にされますか、普通定食以外のコースがありますが･･･」と言われたので、直ちに5,250円の「くじらのフルコース」を初日と２日目の

写真１．国民宿舎「白鯨」のクジラ料理

＊下関市立大学　名誉教授

夕食にお願いしたところ、「二日目もですか？」と怪訝な顔をされた。注文される方は歓迎すべきはずなのになぜかと不思議に思った。一日目にフルコースを食べたところ、これはとてもではないが２日連続は無理ということがわかった。連続して食べるには味が濃すぎるのである。受付の人が怪訝な顔をしていた意味が食べてみてわかった。さすがに二日目はエビ定食（伊勢エビ）にしたが期待していた伊勢エビが車エビなみに小さかったのには驚いた。

シーズンオフのせいか、定員120人ほどの食堂には私以外に１家族（３人）と12人の大学の運動部風の青年達しかいなかった。きっと大学の運動部の合宿だろうと思っていた。食事を終えて風呂（温泉）に入っていると洗い場に先程の頑丈そうな体つきをした青年達がいたので「学生さんですか？」とたずねたところ、「違います。仕事です。」と言われた。聞いてみると、彼らは警察官であった。シー・シェパードの警備のため和歌山市から派遣されて来ているのであった。最初から、鯨のまちならではのできごとであった。

＜役所でのヒアリング＞

まず太地町役場産業建設課副主幹の瀬戸氏と教育長の二人からヒアリングを行った。太地町は徹底して鯨にこだわった町づくりをしたいことや、近隣自治体と条件が合わなかったために合併しなかったらしい。太地町は「捕鯨を守る全国自治体連絡協議会」（29団体所属）の事務局も担当しているほどの鯨のメッカである。

全国の自治体は自らのマチを印象づけるために必ず何らかのキャッチフレーズをつけている。筆者はシャレた呼称がないかと絶えず注目している。太地町は「太陽と黒潮とくじらのまち」（町勢要覧）と称している。そんなものかなとの感想を持ったが、教育長さんは「私なら“くじらと移民と美人のまち”にするんだが…」と言っておられた。確かに町史など太地町の文献を読むと極めて移民の多い町、美女が多い町とその経緯が記されている。『太地町史』（全952ページ）をみると、捕鯨に関する既述が77ページ、移民について52ページ、太地女についてもわざわざ６ページがさかれている。このあたりでは「太地女に古座男」と言われているらしい。

役所の前の通りはブルーム・ストリート（Broome Street）と名づけられていたが、これは姉妹都市であるオーストラリアのブルーム町からとったものである。2011（平成23）年の姉妹都市30周年を記念して命名したのである。かつて太地の鯨が不振で食べていけない時にダイバーがかの地に行っていたことが縁で姉妹都市になったそうだ。またアメリカにも大量の移民が行われていた。教育長が移民の町でもあることを強調されていたのに一理あると納得した。

教育長には町の教育の中で鯨に関することがどのように扱われているかを伺った。太地小学校では３年から６年までの総合学習で「くじらの不思議発見」のテーマで教育を行っているということであった。総合学習は、「地域」、「環境」、「情報」、「防災」のテーマがあり、学年によって配当時間は異なるが、６年生を例にすると、「地域」（内容は「くじら不思議発見」）は年間40時間、「環境」は５時間、「情報」は13時間、防災は12時間となっ

ている。「くじら不思議発見」の配当時間は３年生が年間25時間、４年生が27時間、５、６年生は各40時間である。さすが鯨のまちだけのことはある。副読本として『わたしたちの町の文化財』（太地町文化財保護審議会委員会編、太地町文化財保護審議会委員会、太地町教育委員会発行、52ページ、平成２年発行、平成15年改訂）を使っているとのこと。しかし、教育長から本文中の「太地鯨方遭難の記」（1878年に太地からでた100余名が鯨漁で遭難死した事件）については異論があるので取り扱いには注意して欲しいと言われた。その時は何のことか解からなかったが次の日、たまたま町中を歩いていて言っている意味がわかった。

＜現在のクジラ漁＞

役所でヒアリングを行った後、太地漁業協同組合の杉森理事から話をうかがった。主にバンドウイルカを捕獲しているが最近は不漁で2011（平成23）年（11月末まで）の捕獲数は８頭とのこと。多い時には30頭もとれることがあった。最盛期には200頭を２日をかけてとったこともあるという。ここでは湾内に鯨を追い込んで捕獲するのであるが、鯨が昔ほど来なくなったこともあるが最近は鯨も頭がよくなって（？）なかなか湾内に追い込めないと言っておられた。太地町での鯨の処理能力は一日当たり100頭あるそうだ。

漁協の外にでると警察官数人余りが反捕鯨団体「シー・シェパード」のメンバー６～８人とにらみ合っているところに遭遇した。おそらく昨夜風呂で話した警官達であろう。その日は追い込み漁が行われるとの情報を得て反対運動を行っていたのである。去年の多いときにはシー・シェパードのメンバーが150名もやって来たらしい。彼らは隣の那智勝浦町に常宿している。世界的に有名になったドキュメンタリー映画『ザ・コープ』でみたような険悪な雰囲気はなかった。ただ、“穏やかに”向かい合っているだけであった。杉森理事はシー・シェパードは「鯨を殺す場面だけ大きく取り取り上げてあれこれ言っているが、我々の捕鯨には歴史と文化がある、その全体像の中で捕鯨を見て欲しい」と言っておられた。

＜クジラ商品＞

漁協の前に漁協直営のスーパーがあった。売場面積が400平方メートルぐらいであろうか。太地町には旧来のまち中にかつて「おおくわ」というスーパーがあったが５年前に店を閉じたそうである。３千数百名の人口では無理なのだろうか。そのため食料品販売は漁協のスーパーが担っているとのこと。町にはほかにコンビニが一つあるらしい。このスーパーに鯨にかかわる商品がどのくらいあるか調べてみた。メモしたものを見失ったので商品名は定かでないが、鯨の生肉、ゴンドウ鯨の干物、鯨のうでもの（内臓）、鯨の照り焼き、くじらの味付け煮、太地漬（鯨軟骨の粕漬け）、鯨ベーコン、鯨オバキなど10種類以上もあった。さすが鯨のまちと思わせるものであった。現在でも鯨が捕れると漁師は日常的に知り合いに配って食することがあるそうである。

＜町中巡検＞

いつも現地調査に行くとまち中をできるだけ多く歩くことにしている。太地町は約６㎢

の小さな町なのでくまなく歩いてみた。とくに漁村の集落は独特の風情があって楽しい。二日目の朝、役所に行く前に時間があったので役所付近のまちを歩きまわったがどうもおかしい。道幅が広く道路網が碁盤目状になっている。２万５千分の一の地形図をみてもそうなっている。しかも家が比較的新しい。ふつう漁村集落は道が狭く家が所狭しと立て混んでいる。この点を役所の瀬戸氏に聞いたところ、このあたりは比較的新しい埋め立て地なのであった（1961年竣工1965年完工）。町内にめぼしい平地がなく奥まった入江（水乃浦湾、10万５千㎡）を埋め立てたのである。それを聞いて各種の疑問が氷解した。ということは従来の古い漁村集落がどこかにあるはずである。その集落は漁協の近くにあった。端から端まで300～400ｍあろうか、狭い町並みなので隅々まで歩いたが、やはり漁村集落特有の町並みであった。

＜和田家・太地家と順心寺＞

歩いている途中、たまたま順心寺をみつけた。筆者が行きたいと思っていたがどこかわからなかったのである。太地町には寺が三つある。太地町内の西側の森浦集落にある寺は別として、太地集落内の順心寺には古式捕鯨の創始者和田家、太地家とその譜代的な役職の家々の墓地がある。太地集落内のもう一つの東明寺には一般漁家の墓地があり、漁民がつくった鯨供養碑もある。順心寺の入り口付近の一角に太地鯨方遭難者の慰霊碑があった。そこで佇んでいると、ある初老の人から「何をされているのですか」と尋ねられた。「下関から鯨とまちづくりを調べに来たのです」と答えた。何と彼は太地捕鯨中興の祖・太地氏の末裔であった。1606年に組織的な捕鯨を始め「捕鯨の元祖」と言われているのは当地の豪族和田家一族の忠兵衛頼元であるが、1680年代に網捕法という画期的な漁法を考案して飛躍的に発展させたのが和田角衛門頼治であった。彼はその功績により藩主から太地姓を授けられ、それ以後は太地角衛門頼治となったのである。角衛門頼治の孫ではないかと思われる太地氏はたまたま墓の掃除に来たのであった。太地氏に墓を案内してもらい多くの話を聞かせてもらった。その話の中で、教育委員会が作っている冊子『私たちの町の文化財』や『鯨に挑む町－熊野の大地－』に書かれている太地方遭難の記述は間違っている。そもそもある民俗学者が書いて以来、ずっと間違った記述になっていると憤慨されていた。これまでの記述では、以下のようになっている。

1878（明治11）年の12月24日にいまだかって見たこともない子連れの背美鯨を発見したのであるが、山旦那役の和田金右衛門は本年は不漁であり正月も迫っており、ぜひとも捕りたいが魚も特に大きく天候と時間を考えると逃がしてやるしかないと考えていた。そこへ宰領の角衛門頼治がやってきてこの報告を受けて、「この天の与えられたる大鯨を逸し遣るとは何事ぞ」と怒ったのである。両者持論を譲らず金右衛門が席を蹴って引っ込んだため角衛門頼治の命により出漁となり、結果的に100名を超える犠牲者をだす大惨事となった、と記されている。

そして創始者の頼元は偉大な功績を残し、頼治の時代に頼元の偉業をさらに大飛躍させる偉業を築いたが、それ以後の鯨方の責任者和田一門に対しては批判的な見解が述べられ

ているのである。太地氏はとくに遭難事件の顛末については「事実と異なる、これまでの記述が間違っている。それを示す資料も持っている」と言っておられた。先に述べた、教育長の「太地鯨方遭難の記」ついては異論があるので取り扱いには注意して欲しいとの言はこの事を言っているのだと理解したのである。

＜クジラ関係見どころ＞

二日目と三日目は町内にあるできるだけ多くの鯨にかかわる物件にあたることにした。太地のパンフレットには19の見どころが記載されている。それらは以下の通りである。

●を付したものが鯨関係の見所である。それぞれ視察した所はコメントを付しておこう。

①●鯨の博物館：完成は1969（昭和44）年。３階建て、2,078㎡。「世界有数のスケールを誇る」とパンフレットに記されている。しかし、建設後40年を越えており、老朽感は否めない。入館者の統計をみても最盛期（1969年）の47.7万人からほぼ減少傾向にあり2010（平成22）年は過去最低の12.0万人と1/4に減少している。早晩リニューアルの必要があるように思えた。

写真２．43年の歴史をもつくじらの博物館

②●捕鯨船資料館：私が訪れた時はたまたま工事中で見ることができなかった。通常は南氷洋捕鯨で活躍した第11京丸（キャッチャーボート）が保存されている。

③●太地漁港

④●ドルフィン・ベェイス：イルカとのふれ合い体験ができる。

⑤●ホテル　ドルフィンリゾート

⑥●海洋水族館（マリナリュウム）：自然プールで小型鯨類が遊泳、イルカとクジラのショーが見れる。

⑦●腹びれのあるバンドウイルカ

⑧●シッポのモニュメント

⑨太地の海を満喫

⑩石垣記念館

⑪●行灯式燈明台：くじら供養碑から燈明崎さらに楫取埼に至る遊歩道（1.5キロ）は木立に囲まれまさに「緑のトンネル」、苔むした道路、太平洋の荒々しい海岸の光景とあいまって素晴らしい雰囲気であった。この間、道路脇に20枚のくじらを紹介した表示板が置かれてある。行灯式燈明台は

写真３．1636年から1872年まで現役であった燈明崎の行燈式灯明台：復元

1636（寛永13）年につくられたもので日本で始めて鯨油が使用された。

⑫吉備真備漂着乃地

⑬●古式捕鯨山見台：回遊するくじらの発見と動きに注意し海上の船に伝える重要な役割を行っていた。

⑭筆島

⑮遊歩道

⑯●くじら像モニュメント

写真４．くじら像モニュメント

⑰●楫取崎のくじら供養碑

写真５．楫取崎にあるくじら供養碑

⑱落合博満野球記念館

⑲●漂流人記念碑

上記以外にも順心寺の捕鯨元祖頼元以下和田家、太地家の墓、古式捕鯨狼煙場跡、風流鯨（風力発電施設）、町内を回る循環バスの側面にイルカのマークもある。また、

有形ではないが、「太地くじら祭」（11月第一日曜日）、盆供養花火大会で披露される「洋上くじら踊り」、「鯨太鼓」（８月14日）などもある。

＜おわりに＞

以上わずか３日間、実質1日半の現地視察のため太地のまちづくりの一端を垣間みたにすぎない。しかし、調査を数多く行ってきた筆者の目には、まずは「一見に如かず」、おおよそのことはつかめたと思っている。短いながらも実り多い現地調査であった。平戸の生月、長門の通、下関などくじらに関わるまちと大きく異なるのは、太地は自治体規模が極めて小さいため、まさに町が「くじらづくし」になっていることであり、またそれができることである。平戸市、長門市、下関市は自治体の規模も大きくクジラはまちのごく一部分なのでありそれだけにアピール効果が小さいのである。太地は町の面積が5.96㎢と極めて狭小なため簡単に町中を一日で自転車で回れることも観光のためには都合がよい。また吉野熊野国立公園内にあり、周辺には本州最南端の潮岬、全国有数のマグロ水揚げ港那智勝浦港、日本一の高低差をもつ名勝・那智の滝、世界遺産に登録されている熊野古道と熊野３社、海岸の名勝と見所がふんだんにある。位置的にも京阪神大都市圏と名古屋大都市圏からそんなに離れていない。これら一連の見所を組み合わせれば訪れる観光客も増加し、まちの活性化に役立つはずである。